
ヘンゼルと迷いみこ

絢無晴蘿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘンゼルと迷いみこ

【Zコード】

N4015BA

【作者名】

絢無晴蘿

【あらすじ】

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？

そうなんです。

わたし、いまどつても不思議なんです。

え？

話がよくわからない？

私もわからないんです。

なぜか私、記憶喪失で生き靈になっていました。

「 ジャック・オ・ランタン 」

ジャックとキャンドゥイー

第一話 ジャックとキャンドゥイー

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？
そうなんです。

わたし、いまどつても不思議なんです。
え？

話がよくわからない？

私もわからないんです。

なぜか私、男の子の前に立っていました。

「よひーん、ジャック・オ・ランタンに」

本や小物、筆記具や紙、そのほか様々な物が置かれて雑多な机に肘を置いて、少年は私の方を見て言いました。

綺麗なオレンジ色の髪には、なぜか女の子がつけるようなピンがつけられています。

そして、真っ黒なコートを着ていました。

まあ、家の中でコートなんて、暑くないのかしら？

「あら、ここのはどうなんでしょう？」

どこかの部屋のようです。

少年の座った後ろの壁には、古びた本がほこりをかぶつて積み上げられていました。

まあ、ずいぶん汚い事つ！

掃除していないのでしょうか？

「随分戸惑つているようですね。しかし、大丈夫ですよ。みなさん、最初は戸惑うのですから」

「そうですか？私としては、この部屋の汚さが気になつて氣になつて……ああつ、水で流してしまいたいっ！！」

するととつぜん、少年は不機嫌そうな顔をしました。

「あなた、だれ？てかオレ、お前に話してないから。ほら、そこじやま」

「あら？」

後ろを向くと、私の姿に気づいていないのか、やつれたお父さんのような男の人が、少年の前に歩いて来るところでした。

思わず、少年の前をその人に譲つて上ります。

まあ、私つて優しい人。

「もうしわけない。私はどうしてここにいるのだろうか」

おやまあ、この人もどうしてここにいるのか分からないようです。

「大丈夫ですよ。では、最初の違和感を話してもらいましょうか？」

男の人は、驚いたようです。

「なぜそれを？」

「ここに来る人は、大抵そうですから」

「……」

どういう事なのでしょうか？

男の人は、つらそうに言いました。

「おかしいんです。妻も、娘を、私の事を無視するんです。突然」

「そうでしょうね。それで？」

「なぜか、私の前で泣くんです。みんな、私を見て泣くのです」

「……」

「わからないんですね。どうしてつ、どうしてつ……どうして、私はここにいるのですか？」

「それは、あなたの魂が道に迷つてしまつたからです。あなたの目の前にある、黄泉路に至る道に気づいていないからです」

そういうて、男の子は立ちあがりました。

「あなたは、もう死んでいます」

「そう言うと、男の人は、ぼうぜんと顔を上げました。
「なにを言つているんですか？」

「あなたは、もう生きている唯人には見えない存在なのです。魂だけで、彷徨つてているのです。自分が死んだことに気づかず。自分が逝くべき道も知らず」

「……」

「でも、もう見えるでしよう？　あなたの前に広がる道が」
「……そう、ですね。嗚呼、私は……そうか、そうだったのか。す
まない。お前たちだけを残して……」

そう言つと、男の人は消えてしました。

呆気なく、消えてしました。

本当に、呆気なく。

「あら……」

「の方は、死者？」

「さてと。で、あんた誰？」

「あらあら。私は……さあ、誰でしよう？」

「ふざけてんのか？」

「いや、ふざけてないわ。あら、でも、あなたは誰ですか？」

男の子は、思いつきり嫌そうに顔を見ました。

「オレの名前は、ジャックだ」

ジャック君、ジャック君。

よし、覚えたわ！

「なるほど。ところで、スパロウ君。ここのはどこなのかしら？」

「オレの問いに答える気あるのか。あと、オレの名前はジャックだ」

「そんなんに眉間にしわを寄せていると、ザビエル禿げになってしま
いますよ？」

あら大変。

ザビエル禿げは、一部の人には人気はあるけど、一部の人にはうざが
れてしまうわ！

若いのに、なんて大変なことなんでしょう。

苦労しているのね。

「な、なんでそんな事になる……」

「おかしいかしら?」

「おかしい! ! !」

この人はきっと、ザビエル禿げが嫌いな人なのね。

「ところで、先ほどの男の人は、どうして消えたのかしら?」

「……死んだことを自覚したから、行くべき所に逝ったんだよ

「まあ」

あの人は、やっぱり死んだ人だったの。

「で、お前、名前と、なんでここにいるのか答える?」

「名前……じゃあ、私の名前はキャンティーよ」

「じゃあ?」

「そう。あとね、間違つてもキャロットって言わないでね。私、二

ンジン嫌いなのよ。あ、でも飴も嫌いだわ。どうしましょう?」

「つっこみどころがありすぎて、ビックに突っ込んだらいいのか分からぬ」

「それは、大変ね」

「……」

あら、なんで黙つてしまつたのかしら。

「お前、靈だつて自覚ある?」

「あら?」

何を言い出すのかしら。

「生き靈だつて、自覚あるのか?」

「いき、りょう?」

なるほど。

「だから通り抜けができるのね! すげい、すごいわ、私! ! !」

「えつと、あつと……なんだつて言つんだ、この人つ? ! !」

こうして私、キャンティーと、ジャックは出逢つたのです。

登場人物

ジャック・オ・ランタン

主人公

キャンディー

語り手

ジャックとキャンティー（後書き）

ジャックとキャンティーの物語。
ちょっとした長編になりますが、よければお付き合ください。

裏一話 ジャックとシンシア

裏一話
ジャックとシンシア

「こ」は、行くべき所に逝けない靈達が、最終的に辿り着く館、

ジャック・オ・ランタン

そこで、オレンジ色の髪で片目を隠した少年が、靈達を出迎える。

ジャックが目を開けると、そこには少年が立っていた。

「あれ？」

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンへ」

「……」

緑色の髪に、灰色の瞳の少年。

彼はまじまじとジャックを見ると、笑いだす。

「うわっ、本当にジャック・オ・ランタン？　あ、ボク死んだの？
いやだなあ。ほんと、笑っちゃうー！」

「は？」

なんだ、こいつ。

そう、ジャックが思ったのも、仕方ないことだった。

「ボク、アルトって言うんだ。君は？」

「……ジャック」

「へー。ジャック……ジャック・オ・ランタンのジャック？　その
まんま！」

「……意外だな。若いのに、オレ達の事知つてんのか？」

「うん。まさか、本当にいるとは思つてもいなかつたけど。あつ、ムラサキに教えたら喜ぶかも！……あ……」

「？」

馬鹿騒ぎをしていたといつのに、突然黙りこんでしまつた。

「ボク、死んじゃつたんだつた……」

「……」

この館に来る者は、大抵は死者だ。

彼も、死者だ。

死者は生者と会う事は出来ない。

「死んだつて事を自覚しているのなら、あなたの前に広がる道が見えますよね？」

「……そう、だね」

「……」

「……」

少年は、困ったように笑う。

「でも、まだ逝けないや」

微かな、哀しみを伴う笑顔だった。

「そうですか」

「止めないの？」

「あなたのような人は、ときどきいますから」

「そつか」

時々、迷つてこの館に辿り着き、死んだとわかつてもなお、逝かれない人もいる。

「ボク、約束したんだ」

「？」

「死なないって」

しかし、彼は死んでしまつた。

「約束破つて、死んじゃつた。……だから、せめて……まだ、逝きたくない」

そう、彼は笑うと、ジャックに背を向ける。

「なるほど……まあ、いいんじゃないのかな

そつ、彼の背中に言葉を贈った。

「ボク、あの子を残して逝けないから」

そう言って、彼は消えてしまった。

たぶん、その、『あの子』の元へ。

「ああいう奴らばかりだったら、良いんだけどな……」

こっちの説明も無く自分で死んだことに気づいたり、きちんと理解

して死を受け入れたり。

説明の手間も、説得とかも、しなくていい。

それを、出来ない人もいる。

死んでいる事に気づかない、死を受け入れない、理解できない。

そんな人々は、どうなつてしまつのか？

「憂鬱だ」

そんな彼等は、もはや死者ではない。

そして、それを狩るのが、ジャック・オ・ランタンの仕事……。

館の扉が叩かれた。

黒マントで姿を隠した男が館に入ってきた。

「……仕事だ」

それだけ言つと、また外へ行つてしまつ。

「了解」

そう言つと、急いでその後を追つた。

追加登場人物

アルト

人待ち

ジャックとフェリス

第一話 ジャックとフェリス

みなさん、わたし思うんです。

窓から差し込む光。

その光できらきら光る……ほこり。

この部屋つて、汚い！！

「もう、掃除しましようよ、掃除！！」

「あー、もう。うつさいー。だまつてろーー！」

「ほこりだけですよー。ハウスダストですよー。ハウスダストが舞いあがるつーー！」

「……なにしたいんだ」

「掃除して欲しいんです」

私の名前は、たぶんキャンディー。

たぶんつてつくのは、私が私の名前を忘れちゃったからなのよ。

そして、掃除嫌いな男の子は、ジャック君。

この子は、ザビエル禿げ候補の可哀想な男の子です。

ちなみに、彼は迷つてしまつた魂を天国に送るのがお仕事のようです。

そして、私は実は……。

「何もできない生き靈が、オレに指図すんなつー！」

「まあ、キャンディー怒りましたーー！」

そうなんです。

私、生き靈みたいなんです。

おかげさまで、物には触れず、物体透過し、普通の人には姿を見られません。

しかし、ジャック君のような見える人には、見えるようです。

「だいたい、なんでここにいるんだよ…」

「私の家はどこですか？」

「知るかつ…！」

「この迷える私を導いてくださいな。そして、私はジャック君以外を知らないのです。もう、ジャック君しか頼れる人がいないのです」「あああー聞こえない聞こえない。ほら、そろそろ客が来るから、わっわと消えろ…」

「さやうん」

まあ、酷い人。

私はどうしてか飛ばされて、部屋の隅にぐしゃりと倒れてしましました。

そして、ジャック君は痛いけな私に田もくれず、お客様に言つのです。

「よつじん、ジャック・オ・ランタンに」

「む、ここは何処だ」

そう言つたのは、凛々しい女性の騎士様。
純白の鎧の姫騎士様のようです。

まあ、すてき。

「こijiは、ジャック・オ・ランタンですよ」

「ふむ。珍妙な場所だな。しかし、私は行かなくてはいけないとこ
ろがあるのだ」

「どijiにですか？」

「どiji…」

おや、お加減がよろしくないご様子。

突然顔を真っ青にしてしまいました。

「私は……そ、そうだ！ 私は部下達を助けなければ。私が居ないといつのに、彼等は皆残つて必死に戦つているのだ！！！」

「どこに部下達はいるのですか？」

「関係ないつ、早く、彼等の元に行かなれば」

「ジャック君は、呆れたようにため息をつきます。

「なら、質問を変えましょ。なぜあなたは、部下達から離れたのですか？」

「それは……」

あらあら、どんどん真っ白になつていきます。
やつぱり、風邪のかしら？

「それ、は……」

突然、ジャック君は近くにあつた大きな機械をいじり始めました。
ぴつぴつぴ、と、軽快な電子音が響きます。

その間、姫騎士さん（仮名）は、何かを考え込むように下を向いていました。

「なるほど。思い出せないので、オレから言いましょう。あなたは、前線を離れなければいけないほどの、大けがを負つた。だから、部下達から離れた」

「そ、そう、だ。だがつ」

「しかし、爆破の直撃を受けたあなたは、治療のかいなく、死亡」

「な、なにを言つているのだつ」

「だから、あなたは今、自分がだれで、部下が誰で、何処で戦つていたのかも何も、思い出せない」

「……ちがつ」

「もう、あなたは死んでいるんですよ」

あら。

この姫騎士さんもそういうのね。

でも、姫騎士さんは受け容れられないご様子。

まあ、突然死んでいるなんて言われたら、誰でも吃驚しちゃうわよね。

「うそだつ。そんな事、嘘に決まつていい……あいつらは、私を待つているのだ！」

「……もう、戦いは終わりましたよ」

「なつ」

「数年前に、あなたが最期に戦った戦いは、終わりました。そう言えば、四年ほど前に大きな戦いが終わりました。

百年も続いた大きな戦い……。

この姫騎士さんも、その戦いで剣を取つて戦つた一人みたいですね。

「そんなつ」

「そして、勝つたのは……」

「ど、どっちなのだ。フェリスか、レンデルか」

「フェリス」

あら?

「そう、か……」

「もう、あなたの目の前に広がる道は、見えていますよね?」

「……私は、あの時……でも……まだ仲間と共に戦いたかった。祖国を、守り、たかった……」

「大丈夫、貴女の仲間は戦い抜き、祖国は守られました」

「そう、なら……もう思い残すことはない」

「……」

姫騎士は、そう笑つて消えてしました。

静寂が、訪れました。

「なぜ、嘘をついたのです?」

「うそ?」

「フェリス皇国は、レンデル帝国に侵略されて、消えてしまつたはずですよ?」

フェリスを侵略したレンデル帝国は、その後も侵略を続けました。そして、いくつもの国が消えてしまつたのです。

「そう言つた方がいいからだよ。てか、そういう記憶はあるのか

「……」

どちらにせよ、彼女は天国に逝ってしまいました。

彼女は、ジャックの言つた嘘で救われたのかもしれません。

「で、こつまでここにいるつもりだ」「何時まで？ さあ、何時まででしょう？」

「さつあと、どうかいけえつ……」

「何処って、何処ですか？」

「知るかっ！…」

私はまだ知らなかつたのです。

なぜ、私はここにいるのか。

なぜ、ジャック君はここにいるのか。

そして……舞い散る埃は、部屋はこつきれいに掃除されるのか。

あつ、こゝ、重要ですよー！

ジャックとレガート・レント

第三話

ジャックとレガート・レント

私がジャックの前に現れてから、数日。
すごく、疑問があるんです。

なにって、それはもちろん……

「どうしてジャック君はキッチンがあるので何も作らないんですか

？」

「は？」

そうです。

ジャック君は、何も食べていないです！

人間、食べなくても十日は生きていらるとかいいますが、キャン
ディーは心配です。

「だつてオレ、人間じゃないから」

「……」

「……？」

「まあ、そうだったのですか？」

「いや、気づけよ！！」

まあ、ジャック君は人間ではなかつたのですか！
すっかり、人間だと思つていました！

あつ、まさか、私も実は人間では無いパターンとかではありません
よね？！」

「私は、人間でしょうか！」

「人間だろ」

「まあ、そうですの？」

よかつたよかつた。

あら？

よかつたのかしら？

まあ、いいや。

そんな時です。

初めて そう、初めてなんです！

この家の玄関が、ノックされました！！

まあ、この玄関、どこかに繋がっていたんですか。

すっかり飾りとつっていました。

この家に来る人は、大抵幽霊さんばかりなもので。

ジャック君には生きている人間のともだちがないのかと思つちやいました！

「はーい」

「あ、おいつ！勝手にでんな！！」

「どうぞ~」

「必礼しまーす……誰、あんた？！」

入つて來たのは、どこか機械おたくそうな青年Aさん。

Aさんは、私をまじまじと見た後、なぜか扉を閉めました。

「家、間違いました」

「間違つてない！ レント！ 間違つてないから!!」

そう言つうと、勢いよく扉を開けて、青年Aさんはジャックの元に走りました。

「お、おう、ジャック。なんだ、この人は？！まさか……『レカ？』何やら手元を隠しながら話します。

「んな訳ねえだろ！！」

「はじめまして、お嬢さん。私はレガート・レント。しがない情報屋です」

「切り替え早つ！！」

「まあ、情報屋さん？」

「おこ、レント。かつてに」

「この馬鹿ばつずの相手は大変でしょ！」

「ええ、あ、私の名前はキャンディーと言こます。今後とも、うちのジャックをお願いします」

「このジャック？ オレをお前の物にするな……」

「はい。今後ともごひーきにさせています」

「こっちの話を聞け！」

「大丈夫だ、聞いてこる。ただ、聞き流しているだけだ」

「……」

まあ、レガート・レントさんっぽ、ジャック君を言いくるめてしまいました。

面白いですね。

わたしも見習つて今度やつてみましょ！」

想像して見ると……あら、楽しそうだわ！

今からくるんなんです。

「で、何で来たんだよ」

「ああ、こつもの定期健診だ」

「ジャック君はどこか悪いんですか？」

「いや、違つ。これだよこれ」

「？」

なぜか、レガート・レントさんは機械を調べ始めました。

このまえ、姫騎士さんが来た時ジャック君が使っていたあれです。

「ときどき、こうやって壊れてないかメンテナンスすんの」

「まあ、大変ですね」

「いや、機械は好きだから」

ほほつ。機械おたくと見た私の初見は間違つていなかつたわ。

「一応、情報屋やつてるんで、よければどうぞ」

「はい？」

渡されたのは小さな名刺。

黒い不思議な名刺です。

でも、幽霊の私には、触る事も受け取る事も出来ません。

再びザンネン……。

「情報屋さん……では、私は誰なのか分かります?」

「え?」

「そいつ、記憶喪失でどこの誰だかわからないんだ。なんだからうちに居座るし、どうにかしてくれ」

「今すぐには思い当たらないな……お嬢は分かるか?」

「?」

誰かに、話しかけますが、そこには誰もいません。

ジャック君は馴れているようで、何も突っ込まないようです。

「そう。ありがとう。お嬢。すまないな。すまん。わからないな」

「そうですか……」

ザンネン。

運命の女神はほほ笑みませんでした。

「てか、そいつ引き取つてくれ。仕事のじゃまだし」

「ええっ!ジャック君、酷いっ!!」

「今無理。旦那にちょっとお荷物預かってんの」

「つか……」

「もう、ジャック君酷いです!!」

ジャック君つたら、私が邪魔?

もう、酷いです!

もう、さみしくつてもかまつてあげません!

「一応調べておくよ」

「まあ、お願ひします」

それに対して、レガート・レントさんは良い人です。

そうしてこりの内に、レガート・レントさんは帰つて行きました。

「結局、お前はここにいんのかよ」

「はーっ」

「どこの誰だかわかつたら、とつとと出て行けよ」

「はい……つは……その発言は分からないつかせ」にいてもい
いつて事ですね！！

「つ！！」

しまった！顔のジャック君に、思わずしてやつたりと思つたのでし
た。

追加登場人物

レガート・レント

お手伝い

Pandorabox×イトロヒメシステム

お嬢

ジャックとアルト

第四話

ジャックとアルト

わたしは、こう思いました。

世界には、いろんな人がいるもんだな~と。

「ねねね、君なんていつの？ ジャックの友達？ 生き靈みたいなけど？！」

諦め顔で、ため息をつくジャック君。

その前では、縁がかつた黒髪で灰色の瞳の少年がワクテカと私に質問をして来るのでした。

「私はキャンディーっていつの。ジャック君の保護者よ」

「なんでだ！！」

つつこんでくるジャック君は、もううん無視。もう、恥ずかしがり屋なんだから。

「そうか、ジャックの保護者だったのか～」

「おまえら……」

ジャック君を見ると、何やらあきれ顔で額に手をついていました。

「ボクは、アルト！」

「よろしく～」

「……なんで、オレの周りにや話を聞かんやつらが多いんだ」

「しようです。

「くそっ」

「もう、怒つてばかりだと、玉碎クンみたいに将来ハゲ確定くんになっちゃうぞ！」

「まあ、大変！ ところで、玉碎クンってだれですか？」

「……なんで、オレの周りにや話を聞かんやつらが多いんだ」

「玉碎クンは玉碎クン」

「まあ、そうなのですか」

「だ、ま、れ」

ジャック君は、友達が一人はいるようです。

毎日ひきこもり状態の自宅警備員だったのととても心配だったのですが、心配なかつたようですね。

「ところで、キャンディーはどうしてここにここんの?」

「はい。それは話すも涙、聞くも涙の大激鬪の末

「嘘をでっちあげるな」

「はーい。ちょっと私、記憶喪失になってしまったのです」

「へー……」

なぜか、考え込むアルト君。

どうしたんでしょうか?

「キャンディーっていうんだよね

「はい」

「そつか……」

「?」

「ちょっと、ジャック。かむかむ」

「は?」

なぜか、二人はひそひそ声でお話し。

まあ、私は仲間外れ?

「ひどいわ」

もう、失礼しちゃう!

「おい、ジャック……気をつけろよ

アルトは、キャンディーに聞こえないように小さな声で囁いた。

「は?」

意味がわからんと睨みつけると、アルトは真顔で言った。

「あの子……やばいぞ」

「お前、知つてんのか？」

「知つてる。てか、君、ボクの職業知らんでしょ」

「知るか」

「まあ、とりあえず、忠告はしつく。彼女は別に大丈夫。でも、後ろにいる奴らは強硬手段で来るかもしかんやつひざつかりだから……まあ、がんばれ」

「は？」

「じゃ、ボク帰るね～」

そんなジャックの言葉に応じることなく、アルトは少し離れた場所にいたキャンディーの元へ行ってしまった。

「は？ ちょっとまてよ」

「お、おこつ、どういう意味か言つて行け！！」

「ヤダ～。ばいばい、キャンディー！ また、遊びに来るかい」

「はー！ セヨウナリーハー！」

「くんじゅねえよー 迷惑だー！」

アルト君はからからと笑うと、姿を消してしまいました。

それにして、一体何を話していたのかしら。

「どうしたのです？」

「い、いや……」

おかしなジャック君。

なぜか顔をそむけて、そう言つと奥の部屋へと行つてしましました。

「まあ……」

初めて、ジャック君が動きました。

はい、初めてです。

この部屋から一歩も動かなかつたのに、びっくりです。

そつ、快挙です。

でも一体どうしたんでしょうか？

「あ、入つてくんなんよ」

「せこ」

びしゃべりながら入れて入ったと黙っていたのよ、事前に気づかれました。

無念……。

でも、ほんとうにひつたのでしょうか。

ちよひと、心配です。

そんな感じで、今日も平和に一日は終わりました。

裏一話 ジャックとジャック

裏一話
ジャックとジャック

先輩の後を追つて扉をくぐると、いつもの町では無くどこか寂れた墓地に出た。

先輩は、奥へと足を進める。

それを追つていくと、声が聞こえた。

叫び声にも似た、誰かの声。

思わず足を止めて、その声を聞こえと耳をすませる。しかし、また聞こえる事はなかった。

「聞こえたのか」

「はい」

「今のが……目標だ」

「……」

今の中が、今回消滅させる魂。

「行くぞ」

暗い墓地を一人は行く。

墓地は荒れて、雑草が茂っていた。

墓石も所々ひびが割れて壊れ、中には倒れている物まであった。

ジャックは、先輩を見上げて聞く。

「ここか？」

「ああ」

「……」

「来るぞ」

風が吹いた。

思わず目を閉じた。

そして、目を開けた時には、黒い影がいた。

墓石のまわりを、めぐり続ける影。

それが、幾つも現れる。

「ああなった死者は、もう助からない。オレ等が助けなければ」
ジャックが手を差し出すと、死神の持つような鎌が現れる。
しかし、その色は純白の白。

それが一瞬にして変形し、短剣になった。

先輩も、いつの間にか長剣を持つて臨戦態勢になっていた。

黒い影が、動く。

「いくぞ」

「了解」

白い一閃。

先輩は、黒い影を切り裂いた。

一瞬揺らめいた姿は、霧のように消えて行く。

「まだだ」

氣を抜きそうになつたジャックに、先輩は叫んだ。

黒い影が、晒つ。

小さな墓場のそこかしこから、黒い影がわき出す。

「これが、避けなかつた者たちの姿だ」

その姿を、ようやく視認した。

黒く染まつた黒い影の本当の姿。

それを見て、思わず手を止める。

彼等は、死者だ。

死んだことに気づけず狂つてしまつた者。

死んだことを受け入れられず生に執着する者。

死ぬことを許せず、生者を呪う者。

様々な理由で、避けなかつた者達の集合体だった。

「……」

それを憐れみながら、一揆に斬り裂いた。

迷った死者を導く事。

死んだ後に行くべき所に逝けなかつた者達を、逝く事の出来ない者たちを、行く事を拒む者達を、導くのがジャック・オ・ランタンの役目……。

「グレー テル……」

君は、今、何処にいる？

逝く死者を見送りながら、ジャックはそつと呟いた。

先輩
ジャックの先輩

キャンティイーは町へ出かけました

第五話

キャンティイーは町へ出かけました

家に閉じこもつてゐるのは、体に悪い事です。
やつぱり、外に行かないと！

「と、言つ事で、ジャック君。さあ、外へ行きましょ！」

「は？」

もう、つまらないんです。

だつて、来る日も来る日も、ジャック君は部屋に閉じこもつてゐる
ですよ？

幽靈さんと話す事もありますが、それだつて一日三度あるかな
いかです。

もう、キャンティイーは暇です。

つまらないです。

それに、最近気づいたのですが、部屋と部屋の壁はすり抜けられる
けど、外へは行けないです。

つまり、ジャック君か誰かに玄関を開けてもらわないと外に行けな
い！

そんな私の思いも知らず、ジャック君はいつも通り座つて幽靈さん
を待つてます。

「外に行きましょ～。あ、やつと言えば、この玄関はどうに繋が
つてんです？」

「なんでもいいだろ？」

「気になります」

「気になすんな」

まあ、酷い。

幽靈さんもいなくて暇なのに。

もう、こうなつたら徹底的にいきますよー！

「気になります！」

「気にはんな

「気になりますー！」

「つるさーーー！」

「気になつて木になります！」

「勝手になつてろ！」

「気になります気になります気になりますー！」

「黙つてろーーー！」

「……もづ、暇人のくせに」

「……お前、オレを何だと思つてゐる」

「自宅警備員ですか？」

「ちげえよーーー！」

はあはあ……お互い息を切らせての大げんかです。
それについても、ジャック君、なかなか言いいますね……。

しううがない、最後の手です。

「……もしかしたら、外を見て記憶が戻つたりとか、したりしなかつたりするかもしれないのに……」

「……」

「……」

「……ああつ、もう！ わかった！ わかったから黙れ！！！」

「ほんとですか？！」

「キヤンディーの、勝利です！！！」

ふふ、やつたあ。

「ちょっと待つてろ」

ため息をつきながら、ジャック君は何やら準備を始めました。

ジャック君は、いつもの真っ黒なコートを着てました。

準備するとか言つてましたが、まったく変わってません。

……何を準備したのかしら？

「行つとくが、はしゃぐなよ。それと、たぶんお前、ふつうの人には見えないからな」

そう言えれば、私生き靈なんでしたつけ？

靈つて、ふつうの人には見えないそうです。
じやあ。何をしても気づかれないのかしら？

「大丈夫ですよ。いたずらはしません」

「……するつもりだつたのか」

「まあ、そんな細かいことは放つておいて、外へ行きましょ」
「はいはい……」

ため息をついたジャック君は、あきれ顔で玄関を開けました。
すると……明るい日差しが照つていました。

石畳の道が伸びていました。

そして、それと同じ石で出来た家がたくさん並んでいます。
ジャック君のお家は、その中でもとくに古い家でした。
小さな庭には、雑草が生え茂っています。
まあ、ジャック君つたら、きちんと除草してないのね。
「ところで、ここはどこです？」

「キルタタウン。ショイランドにある片田舎」

「キルタタウン？ ショイランド？ なんですか？ それ」

「こつちは知らねえのか。ショイランドつて言つのは、中央大陸の
南に位置する王国。そもそもキルタタウンはさつき言つた通り、
ショイランドにある片田舎」

「そりなんですか……」

「うーん、まったく知らないわ。
聞いた事も無い。」

レンデル帝国とフーリス皇国の戦いとかは知つてたのに、どうして

かしら？

ま、そんな些細な事、忘れましょう。

だって、記憶喪失になつてから、初めての外出ですもの。

「ところで、オススメの場所とかあるんですか？」

「は？」

「町案内してくださいよ」

「なんでオレが……」

なんてぶつくさ言いうけど、さすがジャック君！
うだうだ言いながら手を取ると、町の中心に向かつてくれました。
少しづつ、人が多くなつていきます。

「あら？ このへんは新しいのね」

石畳の色が、ある場所から変わつっていました。
家も、どこか真新しい感じがします。

「この辺はな……」

「何かあつたんですね？」

「ほら、戦争があつただろ？」この辺はその時に大規模魔術に巻き込まれて壊れたんだ」

「なるほど」

シェイランドも戦いに巻き込まれていたのね。

この前の、フェリスの騎士さんを思い出しました。

彼女は、あの戦争で亡くなつた人の一人。

きっと、この町でも沢山の方が亡くなつたのでしょうか……。

なんだか、ちょっと切ないです。

戦争が終わつて四年。

様々な所に、その影は在りました。

そんな戦争の中、私は何をしていたのでしょうか。

何処に住み、何処で生きていたのでしょうか。

「ところで、ジャック君……」

パツと横を見ると、誰もいません。

パツと反対側を見ると、ネコさんが歩いてました。

パツと後ろを見ると、知らない道が続いています。

「あら？」

ここは、何処なのかしら？

とりあえず、歩いてみる事にしましょう。

「まあ、初めてのお使いだわっ」

頼まれた物はないけれど、ちょっとわくわくです。

「あいつ……」

静かに、ジャックは怒っていた。

「…………迷子になりやがった」

周りの目があるので、小さな声で文句を言つ。
しかし、横を歩いていた人が少し胡乱げにジャックの事をちらりと
見て歩き去つた。

「…………」

もう一度と外出何ぞするものか。

そう、固く誓つたジャックは辺りを捜索し始めた。

キャンディーは町で迷いました

第六話 キャンディーは町で迷いました

あらあら、私、今どこにいるのかしら？

角を曲がると、階段がありました。

そこを下りて進むと、噴水のある広場に出ます。

もちろん、ジャック君はいません。

それにして面白いわ。

進むたびにどんどん道がわからなくなつてくる。

「ジャック君はどこにいるのかしら。迷子になるなつて自分で言ってたのに、迷子になっちゃつて」

噴水の周りをぐるぐる回つて、考え方。

「あら、でもこれって私の方が迷子になつたのかしら？」

ぐるぐる回つていると……め、田が回つてきます。

「うう、気持ち悪い……」

とりあえず、回るのは危険だわ。

ジャック君にも今度言つておきましょう。

「ふう。そろそろ行きましょうか」

何処へ行けばいいのか分からぬけど、とりあえずジャック君を探しましよう。

思い立つたら即実行！

噴水の広場から、戻つてみます。

日は少しづつ傾いています。

日が落ちてしまう前に、ジャック君を探さないと大変だわ。

歩いていくうちに、町の風景は変わっていきます。

先ほどまできれいだった町並みが、どこか寂れています。

ああ、きっとこちらは古い町並みなのね。

そう言えば、ジャック君のお家も古い方でした。

と、話の事は、このへんにジャック君のお家があるのかも。

「あー、でも無理だわ……」

そう言えば、どんな家だったのか、覚えてない……。

とりあえず、歩いていきましょう。

そのうち、たっさまで町中だったのに、原っぱに出でました。周りを見ると、そこでは子どもたちが遊んでいます。

かけっこやかくれんぼ、いろいろ遊びをしていました。よく見ていると、ジャック君くらいの子も遊んでいます。

「まあ、私も入れてもらおうかしり」

でも、残念。

そう言えば私、生き靈だったわ。

あの子たちとお話しもできない。

「あら?」

そんな彼らを、私と同じように見ている男の子がいました。近くの木に登つて、そこから見ています。

まあ、木登りなんて出来るのね、すごいわ。

私、木登りなんてしたことないもの。

あら?

私、木登りしたことが無かつたのね。

そんな事を考えながらその子を見てみると、その木に登つていた子が何かに気づきました。

勢いよく木から飛び降ります。

痛くないのかしら?

無事着地すると、一呼吸に向かって走つてきます。

「おねえちゃん、あそぼ」

「わたし……ですか?」

あら??

この子、私が見えるみたいですね。

「やうだよ」

そのまま、やつぱり笑うと手を差し出しました。

「全然見つかねえ……」

町の中心にある教会の横で、ジャックは呟いた。

「くそ、あのばか……どこに行きやがったんだよ、
そう毒づきながらも、さすがに心配になつてくる。
なにしる、キャンディーは記憶喪失なのだ。

加えてあの性格。

自分に関する以外の事はいろいろ覚えているみたいだが、ショイラ
ンドの事は知らなかつたみたいだし。

「……あれ、使うか

と、帰りかけて止まる。

そう言えば、この辺の道はいろいろ変わつた。
昔はもつとじっちゃじっちゃしていたのだが、今はすつきつとしている。
知らない店が立ち並んでいる。

そう言えば、屋敷にこもつてから数十年はこの辺まで来た事が無か
つた氣もある。

「…………いやいやいや、そりゃないだろ。まさか……オレ……
迷つた?

「……」

いろいろショックだ。

何十年も住んでる町で、迷うなんて……。
すでに、日は暮れ始めている。

とにかく、館に戻ろうと歩きはじめる。

「しょ、しょうがねえよな。だって、仕事だったんだし、外に出る
機会も無かつたし」

自分でもよく意味のわからない言い訳をしながら道を行く。

そのうち、知つている道にでた。

館はこの近く。

ほつとしたジャックの前に、家路につく子供たちが走ってきた。

「ほり、へりくなる前に帰らなこと」

「えー」

「かあさんが怒るわ」

「この前夕食ぬきつて言われた」

「うわ。ひどー！」

「くらくなるとお化けができるから、早く帰つてこつて

「お化け？」

「お化けなんていなー」

「ほり、こりー」

夕日に背を向けて走つていぐ。

「……お化け、ね」

彼等は気づいているだろつか？

今、擦れ違つたジャックが、化物だつてこと。

「……」

ジャックは、無言で足を止めた。

「やついえば、あの辺の原っぱは探してなかつたな……

そつとつて、向かつ先を少し変更した。

キャンティイーは町で遊びました

第七話

キャンティイーは町で遊びました。

木登りにおいかけて、「かくれんぼに負けり……」。

「ストップ！ だ、だめです。私、体力がありませんでした！！」
あまりにもはしゃぎすぎて、根を上げてしまいました。

それにもしても、子どもってどれだけ元気があるんでしょうか？
もひ、私はへとへとで……。

「えー、じゃあ、おみせやれん！」
「ちがうよ、こんどはおはなしをききたい！」

「じゃあ、追いかけっこしようよ」

「せつこうしたじやん！」

「あらあら……」

いつの間にか、遊んでいた子達の数が増えています。
どうしてかしら？

まあ、楽しそうだしこわいからら。

「でも、もう夕方ですよ？ みなさと、帰る時間では？」
空は、綺麗なオレンジ色に変わっていました。

明日は晴れかしら？

「まだ、あそぶ！」

「そうだよ、まだ一緒にいよ！」

「でも、暗くなっちゃうわ」

それに、よく考えたら私、ジャック君を探している途中でした。

「だめだよ」

最初に出会った子が、ギュッと袖をひっぱつました。

「だめ、ですか？」

「ずっと、こつしょにあそぼう」

「ずっとは無理ですよ。だって、暗くなつたら家に帰らなきゃ」

「かえるといろなんて、ない」

「え……？」

あたりの空気が変わつた気がしました。
どこか暗く、黒く、息苦しい。

「キャンティー！お前、何やつてんだつ……」

「あ、ジャック君」

町と原っぱの境界に、ジャック君は立つていたました。
怒つてるかしら？

でも、どうやらどうか違うようです。

なぜか、怒つているといつより驚いていたよつでした。

「は、早く離れろ！――」

「え？ なにからですか？」

「そいつらからだ！――」

「そいつら？」

周りを見ると、一緒に遊んでいた子達が私の周りに集まつてジャック君を睨んでました。

誰かが服を引っ張つてます。

「そいつらは、悪靈だ！――

「え？」

ジャック君が、一瞬真っ白で大きな鎌を出したよつに見えました。
その鎌は、一瞬のうちに短剣に変わります。
まあ、魔法みたい。

それに気づいた子が数人、抱きついてきました。
まあ、ジャック君つたら、どうしたのかしら？」

「だめ、まだあそぶ」

誰かが、言いました。

「ずっと、ずっと……」

「だって、まだたりない」

「だから、おねえちゃん。いつしょにあそぼ
無邪気な瞳で、彼等は聞いてきます。

誰かが、また服を引っ張りました。

遠くで、ジャック君がなにやら叫んでいます。

「もう、みなさんダメですよ。暗くなつたらお家に帰らないと
「かえるばしょなんてないよ」

いつの間にか、動けなくなつていきました。

さつきまでいなかつた子たちが何人も増えています。
そして、私の周りを囲んでいました。

「それでも、きっとみなさんのお母さんやお父さんが心配してます
よ?」

「おとうさんもおかあさんも、もういないよ」

「だれも、しんぱいなんてしない」

「だから、ずっとあそんでいられる」

いつの間にか、黒い影が辺り一面に広がっていました。
「キャンディー！」

ジャック君がどこか遠くで叫んでいます。

その姿は、いつの間にか見えません。

あら、何時の間に消えちゃったのかしら?
でも声はきこえる。

不思議だわ。

どうしてかしら?

「ねえ、ずっとあそぼう」

みんなが、私の事を見ていました。

「ダメですよ。心配する人がいないとしたら、私が心配します」

「……え?」

「私が、あなた達を心配します。暗くなつて小さい子だけで遊ぶな
んて、危険です。だから、今日はもうお開きにして、また明日、外
が明るくなつたら遊びましょう? 明日も明後日も、日は昇るんで
すから」

「ほんと?」?

「本当にです」

「うそじゃない?」

「私、嘘だけはつきませんよ

「あしたもあそんでくれる?」

「ええ」

「じゃあ、また、あそんでね」

「ぜつたいだよ」

「とおくにいっても」

「わすれないでね」

「やくそくだよ」

「ええ。約束です。だから、今日またよろづなら」

氣づくと、原っぱにいました。

隣で、ジャック君がため息をついています。

あら?

みんなはどうに行つちやつたのかしり?

まさか、瞬間移動?!

す、す、ご、いわ……最近の子は、瞬間移動なんて出来るのね。

「バカかお前」

「まあ、ジャック君! バカって言つたら、言つた人がバカなんですよ!」

「あー、はいはい。……とりあえず、無事でよかつた

「……あの子たちは、何処に行つてしまつたのですか?」

「逝つたよ」

「……なんですか?」

「あいつらは死者で、この世に留まる無念が無くなつたから

「……」

「ほんとうは、わかつていました。」

あの子たちは、もう死んでいるという事に。

「……じゃあ、あの子たちの無念は、遊びたかったっていう事ですか？」

「ただ、遊びたい。死んだとか関わらず、みんなと遊んでいたい
私は、明日も明後日も遊ぼうと約束しました。

だから、みんな満足して逝つてしまつたのでしょうか。
また、明日も明後日も遊べるから。

そう、私が約束したから。

「帰るぞ」

「はい……」

キャンディーは嘘をつきました

第八話

キャンディーは嘘をつきました

田は、沈んでしました。

真っ暗な夜道を、私とジャック君は歩きます。

「で、キャンディー」

「なんですか？ ジャック君」

「このバカ！ なに迷子になつてんだ！ しかも悪靈なんかと遊んで…！」

「ええ？ あの子たち、悪靈なんですか？！ といひで、悪靈つてなんですか？」

「……お前な」

まあ、額に青筋がつ。

ジャック君、堪忍袋の縒が切れそうです！

でも、堪忍袋つてどこにあるのかしら？

「逝けない死者は、時として生者を呪う。その理由はそれぞれだが、悪靈になつたやつらは居るだけでも生者に影響を及ぼす。それが悪靈だ。地域によってはそれを鬼だと悪魔だとか言つけどな」

「まあ、そなんですか？」

「お前、本当に自分の置かれた状況わかつてたのか？」

「え？ 遊んでいただけですけど？」

「……あいつら、お前に憑いてたぞ」

「？」

「憑いて、力を奪つて、どんどん実体化していた」

「実体化？ あ、もしかしてどんどん人数が増えてたのは、そのせい？」

まあ、そうだったのね。

どおりでどんどん遊んでいる人数が増えていると思ったわ。

「普通の人間が憑かれても、死にかける奴だつているんだぞ。お前、今日は無事だつたけど次はどうなるか……生き靈であることを自覚して気をつけろよ」

「ところで、あの子たちはどうしてあそこにいたのかしら?」

「お前な……」

ジャック君はため息をつきますが、教えてくれました。
「きっと、戦争で死んだ子供たちだ。さつき言つてただろ? 町の中心部は大規模魔術に巻き込まれて崩壊した。その時に死んだのに、死んだことに気づかなかつた子どもたちの集合体……だから、生前何時も遊んでいた所にいたんだ。家は、壊れたり、壊されて新しく建築されたりして、居るべき場所も、帰るべき場所がも無くなつてしまつたから」

そんなきりのいい所で、お家に到着しました。

次の日。

「ジャック君……私、なんだかすごく疲れてます……」

なんだか、体が重いし、熱っぽいし、あら?

これつて風邪の症状?

でも、生き靈つて風邪をひくのかしら?

「当たり前だろ。あれだけの靈に憑かれてたんだぞ。これで疲れて

なかつたら、お前人間じゃないぞ」

よかつた、じやあ人間なのね、私。

「うう、なんか、だるいです」

「向こうの部屋でじつとしてろ」

「はい……」

とりあえず、近くの部屋に行きます。

そこは子ども部屋で、女の子が使っていたような形跡がありました。

そこで、休憩。

「ジャックくん」

「なんだよ」

「窓、開けといてください」「は？」

「いい空気を吸いたいので」「はいはい

今日は、ちょっと優しいジャック君でした。

でも、ごめんなさい。

キャンドイーはちょっと嘘をつきました。

別に、いい空気を吸いたいわけじゃないんです。

いつもの書斎に戻ると、ジャックは電話を取った。

「アネサン？ オレだ。お前に頼みがある。……は？ お、お願ひします、アネサン。これでいいか？……それが、ちょっと面倒な奴がいて……生き靈……はいはい。わかってる。じゃあ、今度……」短い会話を済ますと、いつもの椅子に座った。

「まつたく、世話のかかる……」

考えるのは、キャンドイーの事。

よく思い返すと、あのまま探さなければキャンドイーとは縁を切れたかもしれない。

最初のころは早く出てい家だとか言っていたのに。

「オレって甘いのか……？」

見た目、十二歳の子どもだから、侮られることはよくある。でも、あんなふうに振り回されるのは初めてだ。

「……一体あいつ、なにもなんなんだよ

アルトには危険だと言われた。

キャンドイーの事を調べているはずのレガート・レントから、まだ何も連絡は来ていない。

平氣で人の保護者すらして、勝手にハゲ認定しやがる。
悪靈に憑かれても、疲れるだけ。

「……」

あの時、キャンディーには言わなかつた。
あれだけ沢山の悪靈を議つた行かさせるほどの力を奪われて、まだ
この世界に存在しているキャンディーは、異常だ。
普通の人間だつたら、生き靈じや無くとも死亡したり一度と目覚め
なかつたりする。

それなのに……。

ふと、様子が気になつてあの部屋に向かつた。
ちょつと開けてみると……部屋は、もぬけの殻だつた。
「あいつ、何処行きやがつたつ？！」
開いていた窓から、曇天が見えていた。

ジャックは、昨日の原っぱに來た。
そこで、キャンディーを発見する。

たぶん、開いた窓から外に出たのだろう。
窓を開けて欲しいつて、この為だつたのか。
そんなキャンディーは木に登つて誰かを待つていた。

「おい」

「あ、ジャック君」

木の下まで行くと、キャンディーはいきなり飛び降りた。

「お、お前つ！」

そのまま、ジャックを潰す。

「がはつ」

「着地、成功です！」

「……重つ。成功じやねえよ！ ビゴが成功だ！ オレ潰して……
しかも重つ！！ 早くどきやがれ！！！」

「まあ、重いなんて女の子には禁句ですよ？」

「ほんのことだ」

しぶしぶどいたキャンティーは、どこか遠くを見ていた。

「来ません」

「誰が？」

「昨日の子達」

「当たり前だ」

「でも、約束したんです。今日も明日も、遊ぶって」

「あいつらは、逝った。もうここには来ない」

「……また、会えますか？」

「さあ？」

ハロウィーンや盆、年末には靈たちが戻ってくる。

その時なら、会えるかもしれない。

あと、もうひとつ。

この世界で、輪廻転生があるとか、ジャックには判らない。

ただ、死者を導く事がジャックの役目だから。

でも、もし生まれ変われるのなら。

「いつか、会えんじゃねえの？」

「そうですか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015ba/>

ヘンゼルと迷いみこ

2012年1月14日21時48分発行